

---

Ash,poetry with

菜智

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Ash, poetry with

### 【Nコード】

N2267V

### 【作者名】

菜智

### 【あらすじ】

悪にも聖にも染まらない中立の立場の少女は誕生するはずの無いレギュラーの存在。灰色の立場にいる名も無き少女は、ある日、1人の悪魔と出会う。

それは、過去から紡がれる約束の旋律の物語。

## ―始まり・名も無き少女―

天使、それは聖なる力を用いて悪なる者を滅する神からの使者。それが古来からの世界の常識であった。

だが、その常識が覆す事件が起こった。発端は気まぐれな高位神力プリースが気まぐれに実験した「相対する者の混合干渉実験」簡単に言うなれば天使と悪なる者、悪魔を1つの体に混ぜた場合どんな干渉をし、どれくらいの力を生み出すのかをデータとしてまとめる・・・それだけで終わるはずだった。だが、カプリースは予想を遥かに超えた結果に味をしめ大勢の天使と悪魔を混合干渉させ、それはウィルスのように天界、冥界共に甚大過ぎる被害と犠牲を生んだが女神リイフの力で天使と悪魔の分離に成功。しかし、2つ問題が発生した。

1つは、分離の際発生したカプリースに対する憎悪の念が形を成し、魔牢という新種の悪魔となり世界に蔓延り始めた事。

2つ目は、女神リイフが一斉分離を行った際、分離が充分でなかったため悪の力と聖なる力のどちらをも身に秘めた天使というイレギュラーの存在が誕生してしまった事。

1つ目の問題は、天使を地上に派遣し魔牢を討伐させる事で一先ず、事態は落ち着いた。

だが2つ目のイレギュラーの存在については会議まで行ったが、意見が纏まらず事態は硬直状態のままだ。

その天使を神々は皮肉をこめてこう呼んだ。

「灰色魔天使」と。

建物であつただろう瓦礫が道を塞ぎ、どこからか幼子の泣き叫ぶ声。そして日夜行われる強奪、殺人。それらは全て明日を生きるために必要な事。誰もがそれを分かっていた。

## 第2零5次大戦。

当時、強大な軍事国だった日本とアジア諸国の間に起こった第2次世界大戦規模の戦争だったことからそう呼ばれている。この第2零5次大戦も日本の敗戦で幕を下ろした。

瞬間破壊焼爆弾という爆弾が首都東京に投下され機能は全て麻痺し、日本は戦う気力を無くし自ら降参した。

東京は未だ瓦礫の街としてゴーストタウンとなっている。そして、そんな寂れた街に魔牢は群がり人々の負の感情を糧にその数を増やしていく。

そんな東京と呼ばれていたその場所に1人の天使が舞い降りる。

―旧新宿区―

瓦礫の中蠢く魔牢達が1つの方向に一齐に視線を向ける。そこにいたのは腰まで伸びる白髪を棚引かせ、真紅の鎌を一振り回すあどけない少女の姿。魔牢達は本能的に少女を喰らわんと飛び掛る。

「彼方に永久の抱擁を。フォエー・ハギユ。」

飛び掛る魔牢に動じる事も無く、少女は滅魔法を短く唱える。すると、魔牢達の前に巨大な獣の口が現れ大きく開いたそれは魔牢達をいとも簡単に飲み込み弾け、瓦礫の街に似つかわしくない灰色の雪のような光の粒を降らす。それは幻想的な風景を作り出し見る者全ての心をうばうだろう・・・見る者がいれば、の話だが。

少女はその中で、討ち損ねた魔牢を己の丈ほどの鎌を軽々と振るい次々に葬っていく。その姿は観客のいない舞台のように精密で、硝子のように儂い、そんな舞だった。たつた3振りですべての魔牢を討った事を確認した少女は動きを止めて黒いビー玉サイズの珠になる魔牢を僅かに目を細めて眺めていた。僅かに顔が強張る。

「もう、終わったか？相変わらず、仕事の正確さも噂通りだな？」  
少女の背からあどけない黒い翼の少年の声が聞こえてきたが少女は気にする事も無く次のエリアに向かうため、歩を進める。慌てて声の主である少年は少女の横を同じ歩調で歩く。

「・・・・・・・・・・」

「え？何か言った？」

思わず言葉を発してしまった少女はそれに若干の後悔をしつつ、少年に聞いた。

「私に、何か用でもあるの？」

「用と言った用は無いんだよね。ただ、あんたに興味があるんだよ。悪にも善にも染まらない中立の立場に存在するイレギュラー」  
灰

少年が言い終わるのを待たず、少女は少年の喉元に突きつけようと鎌を振ったその先に

「っ！」

少年の姿は無く、辺りを見回すと自分のすぐ後ろに標的の少年が飄々とした表情で立っていた。何度鎌を振っても結果は同じ。

「・・・何が目的なの？それほどの力を持ち、まだ何を望むの？」

「望む、とはちよつと違うかな。・・・しいて言うなら、見守っていたい。」

少女は顔を顰める。

「何故？」

「それは俺自身にも分からないんだよね。」

「意味が分かりません。」

「ま、一緒に行ったら思い出すかも。」

少女は苦笑する少年に今までにない何かを感じた。温かく、儂く、近くて、遠いそんな感情が複雑に絡み合ったそれを初めて感じた少女も少年といれば正体が分かる気がした。

（誰かと会ってもこんな事、なつた事がない。・・・これが無くなるまで仕事も出来ないだろうし。）

少女は深い溜息をついて手を差し出す。

「貴方の名は？」

「ああ、俺の名前はリエシアル。リエシって呼んでくれ。」

「私は・・・」

少女は差し出した手を少し引つ込めた。

「どした？」

「わ、私には、名乗る名が、ありません。ですから。」

少年は少しの間考え込むと右手の人差し指を立てた。

「アシュリテイ」

「え……？」

「灰のASHに中立のneutralityを合わせて、アシュリテイ。」

「アシュリテイ……。それが、私の……。」

「気に入らなかった？」

「……私の名は、アシュリテイ、と申します。これから宜しく。」  
アシュリテイの名を得た少女は微笑み、リエシと握手をした。

―始まり・名も無き少女―（後書き）

初めてのオリジナル小説なので、文が所々変になってしまっている  
かもしれない。ここまで読んでいただきありがとうございます！  
もう感無量です！

―闇夜の彼女・夢現への誘い?―

リエシと握手した手を離れたアシユリテイは先程の微笑みを潜め、周りを見渡し魔牢がない事を確認すると鎌を地面に刺し、1回転させた。そして小さく誰にも聞こえないほどの声量で呪文を唱える。「紡ぎ、紡がれる終わり無き記憶。望むは永久の安らぎ。」

言葉は蒼い線となり宙に浮かぶ。浮かんだ蒼い線は他の線とぶつかりと缺で切られたように短くなり、それは紙吹雪のように舞い散り淡い光を放つ。

「とりあえず、ここから離れる。魔牢がいつまた来るのか分からないから。」

「何処へ行くんだ?」

「誰にも邪魔されない場所。・・・路を開く。」

蒼の光は2人を包み込むように強く発光し、光と共にその場から消えた。

誰もいなくなつたその場に響く空を切るような笑い声。それは区に唯一残っている高層ビルから。

「くっふふふ。あーおつかしい、あの「灰色魔天使」が一介の悪魔と共に行動するなんて。天変地異の前触れなんじゃないのう?ま、どっちでも私達は構わないけれども。」

「でも、面白い物が見られたのだから結果オーライなのでは?」

先程笑つた声とは声質の違う、落ち着いた大人びた声の少年はもう一人の少女を咎めるように制する。

「それに、これ以上、核、に干渉しすぎてはいけないとエンブに怒られてしまいますが?」

「あーあ。もうちょっと多く配置しておけば良かったなあ。後でエンブに交渉でもしよつと。」

黒い外套を翻した2人の少年少女はビルから飛び降りる。地面につく前に外套はいなくなっていた。黒の羽を残して。



「旧臨海エリア」

瞬間破壊焼爆弾の爆心地だった臨海部は空气中に漂う毒の影響で他の地区よりも荒廃が進んでいた。瓦礫らしい物も投下時に全て吹き飛ばされているため、一面が更地となっている。

「ここなら、人は来る事が出来ない。だから、思う存分話出来る。」

「これから、アシュはどうするんだ？」

「私には特命がある。私はそれを調査、危険がある場合、排除する。」

「

「ん、そっか。なら俺もついていく」

「・・・勝手にするといいい。」

アシュリティは何も無い更地を特に感慨を抱く事も無く危険な存在がいないか眺め、そして見つけた。

「・・・そこにいるのは、誰」

とても遠い、常人では確認不可能な場所にいる誰かを感知しアシュリティは危険かを見極めるため標的に近づく。

「・・・何故。」

「あの、なんでしよう・・・か？」

その場所にいたのは年齢13、4ほどの少女だった。だがアシュリティが疑問に思った事は少女がいた事ではない。

（何故、こんなに近くにいて感知できなかった。）

少女の存在は目視して初めて感じれるほどに薄れていて、まるで消えかけた蠟燭の灯火のように。

「お前の名は。」

「わ、私はプティ、と申します。」

プティはぬいぐるみを抱きかかえる手に力を込め、怯えたようにアシュリティを見上げている。

アシュリティ、プティ双方が黙ってしまい重い空気が漂い始めた頃。

「うわ！何この子、どうした？」

「私、気がついたらここにいて。あの、ここって何処ですか？」

「何処って、東京だろう。」

「とう、きょう？」

今の時代、東京を知らない人はいない。あの大战以降、施行された法律により生まれる前、つまり胎児の状態の時に大战に関する情報はあらかじめ脳内にインプットされているためこの惨状を知らない者などいないはずなのだが。

(政府がインプットし忘れるほど、落ちぶれてはいないだろう。なら、これは……)

「お前、ここに来る前、誰かと会っていなかったか」

「……あ。えっと黒い外套を着た人と会いました、けど」

アシユリティはプティの返答に確信を持ったように頷いた。

「なんか心当たりでもあるのか？」

「私が追っている、知能の高い魔牢。人の記憶を奪いそれを餌として他の知能の低い魔牢を統率する。危険には違いないが、目撃情報が少なく、なかなか見つからない。」

「人に擬態してる、とかは？知能が高いのならそれぐらいは可能だろう？」

リエシが一番あり得る事を言うと、アシユリティは呆れたかのように小さく溜息をついた。

「お前、本当に悪魔か。いくら知能の高い魔牢とはいえ完璧に人に擬態する事は不可能。どうしても人ならざる者の匂いが残ってしまう。」

「あ、でもその人、貴方に伝えたい事があると」

プティは思い出したように言った。

「何を……っ！」

アシユリティは自分の死角からの攻撃をきりもみで避けると鎌を持つ手に力をこめた。

(何……。この今までの魔牢にはない膨大すぎる魔力は)

アシユリティは辺りを見回して、魔力の元を探したが膨大すぎる魔

力ゆえに元を辿るのは造作も無かった。何も無い更地、それもさほど遠くはない距離に目立つ黒の外套を着た誰かが立っていたからだ。その誰かはゆっくりとアシュリテイ達の所へ、数歩、歩み寄る。たった数歩で止まったのはアシュリテイが鎌を構えたためだった。

「・・・別にこつちからは何にもしないよ？」

まるで友達のように誰かは話しかけたがそれで警戒を緩めるほど、アシュリテイは無用心ではなくむしろ警戒を強めた。

「お前、誰だ」

「つれないなあ。ただ、私は私達のリーダーからの伝言を言うだけに来たのに」

アシュリテイは眉をひそめた。

「・・・お前、仲間がいるのか」

「仲間というほどの関係ではないよ。私達は。ただ、リーダーの下に集っているだけの脆い関係、つてとこかな」

誰かは妖艶に微笑むと真紅の髪を軽く撫でた。

「さて、と。あんまり長居はするなと言われているからさっさと伝えるね・・・リーダーはこう言っていたわ」

「もう、詠わないの？」

そのたった数文字の言葉にアシュリテイは反応して、肩をびくりと震わせた。その後も肩の震えは止まらない。

「もう一度、あの目をやり直せるとしたら？」

「・・・アシュ？」

「もう、一度？」

「やり直したいと、願うのならば。詠いなさい。」

あの誓いを――

「あの日の誓い・・・」

アシユリティはただひたすらに同じ言葉を呟く。

《ルリエ・ナルス》と。

誰かは軽く息をついた。

「これで私の用事はおしまい。それじゃ」

「待て」

少し震えの止まったアシユリティはそれでも凜とした声は変わらずに、立ち去ろうとする誰かを引き止めた。

「お前達のリーダーは、何者だ。」

「私達は人でもなく、かといって知能の高い魔牢でもないの。言葉で表現するなれば・・・祝福されぬ子」

誰かはそう言くと、アシユリティの制止の声も聞かずその場を立ち去った。

詠う？あの日の誓い？やり直す・・・？

リエシの頭には訳の分からない言葉が並び、混乱していく。

「・・・お姉さん？」

プティの言葉にはつととしてアシユリティを見ると。

「一度、ここを離れる。あいつらがここを拠点としているのならば敵の陣地にいるようなもの。あまりにも危険過ぎる」

アシユリティは臨海部に来た時と同じ様に小さく呪文を呟いた。

「永遠の安らぎは、悠久の時に束縛され潰える事はなし」

今度は赤の線が空に散りばめられる。その赤い線は淡く、黒い光を強く発して三人を飲み込んだ。

転移が完了したのとほぼ同時。

ードオオオオオオオオオナー

臨海部一帯を爆発音が包み込み、唯一残っていたビルも全てが消えうせた。

これはのちに、「非情な天使の微笑み」という名で世間に知れ渡る事となる。

「……どうして？」

闇に震える誰かの声。

「やめっ！やめー」

その声は闇に塗りつぶされて何も聞こえなくなった。

「……っ」

酷い嘔吐感が体を襲い、アシユリテイの意識は強制的に現実を引き戻された。

本来、天使は人間が必要とする行動（睡眠や食物の摂取など）を行う必要がない。魔牢討伐を常時、可能とするためだがアシユリテイは逆に必要とする行為を積極的に行っている。魔牢は人の感情を喰らうため案外人の近くに潜んでいる場合が多いため、人に疑われずに任務を遂行するため、とアシユリテイ自身そう思っている。

「旧北区」

比較的、被害の少なかったここでは生き残った僅かな人々が身を寄せて暮らしている。そのためアシユリテイはあの黒外套が襲ってこない、と判断してプティを落ち着かせるためとこれからを考えるために転移して来たのだ。……尤も、黒外套の狙いは自身のためアシユリテイは人々が暮らすキャンプから離れている。

「……はあ、はあ」

暗くて、内容が不明瞭だった夢のせいかわ呼吸が落ち着かない。

「さく、さくー」

背後からの気配を感じて振り向けば、そこに立っていたのはぬいぐるみを強く抱きしめたプティだった。

「……どうした、お前。キャンプに行ったのじゃないのか」

「あ、はい……。あ、あの。」

「……なんだ」

プティは言葉を返さない。アシユリテイはただ俯くプティには何も思わなかった。プティが言葉を発するまでは。

『灰色魔天使』

「・・・！」

プティから発せられた声は幼さの残るそれではなく、幾年を重ねた声。

『天使は人が必要とする行動を行う必要がない。なのにそれを行うのは・・・何故』

アシユリティは模範解答のようにすらすらと答えた。

「魔牢は人間の近くに潜んでいる場合が多いだからー」  
『嘘』

その答えをプティの姿を借りた誰かが一蹴する。

『限りなく人に擬態するため・・・そう、思っている。』

本当に？』

どくん、とアシユリティは心臓がはねるのを感じた。それを知ってか知らずか、プティに見える誰かは話し続ける。

『貴方の感知できない心の奥底、深層心理と言つべきかしら？そこではそんな事これっぽちも思ってたなんかいない』

鎌を持つ手に知らず知らずのうちに力がはいる。

『本当は』

人として、生きたいのじゃないの？』

夢を見た直後のような嘔吐感と共に、頭痛が襲いアシユリティは耐え切れず鎌を支えにかろうじて立ち続ける。

(得体の知れない奴にここまで・・・っ)

『ああ、自己嫌悪に浸らなくてもいいの。むしろ貴方のその姿が私達の望む理想の終焉の形なのだから』

微笑むプティの誰かにアシユリティは息を整えながら誰かに聞いた。「お前は、お前達は何なんだ。私に何の用だ」

『目的とかは無いの。別に。ただ』

プティらしき誰かが口ごもるのをアシユリティは見逃さなかった。

素早く鎌を振り、距離をとる。

『私、は待っているから。もし、全てを知ろうという気になったの』

なら。この子にこう言っただけだ。」

プティの胸に手を当てて、誰かは言う。

『永久の契約に背き、彼の者の扉を開く、と』

そう言うのと、プティの体から何か黒寄りの灰色の光の粒子が抜けてプティはそのまま倒れた。

―永久の契約―

その言葉が指し示す物にアシユリティは心当たりがあった。

(それに背く事は、つまり・・・)

「お、姉さん？」

アシユリティが思考を巡らす僅かな時間の間にプティはゆっくりと体を起こし、辺りをきよるきよると見渡した。

「ここは・・・？わ、私。どうして・・・」

「あ・・・。そ、それは」

アシユリティが理由を考え、言葉に詰まっていると。

―っうわああああああああ―

キャンプの方向から人の怒号や叫びが聞こえ、それから程なく。

『グルルウ・・・』

「っひう！」

グリズリーのような獣が木を切り裂いて現れた。プティが小さな叫び声をあげるのを他所に、アシユリティは素早く敵の懐に飛び込むと鎌で一閃、切り捨てた。

「お前はここで待っている。キャンプを見てくる。」

アシユリティは鎌の軌跡でプティを囲むと、木の茂みの中に消えていった。

―北区・キャンプ―

アシユリティがキャンプに着いた頃には、辺りには獣型の魔牢が溢れ人々が逃げ惑っていた。

「アシユ！」

「何故、これほどの数の魔牢が」

「分からない・・・だけど、こいつら様子がおかしい。」

そう言つて、リエシは手に持っていた槍で手当たり次第に魔牢をなぎ払つていく。それはアシュリテイにとって当たり前の光景。

「この何処が・・・」

「アシュ、構えろ！」

「っ、う！」

リエシの声に反応するより早く、魔牢がアシュリテイの脇腹を鋭い爪で切り裂いた。脇腹から赤い粒子が飛び散った。

「アシュ！」

「それより、一帯の魔牢をなぎ払う！」

アシュリテイは鎌に持ったまま、舞踊るようにその場で回り始めた。次第に舞はアシュリテイの周りに風を起こし、それは龍の形を成していく。

「アシュ・・・！」

「全ての御の力、我の名において顕現せよ。滅せよ」  
風の龍は大きさを増し、やがて、一帯の魔牢をも風の中へ取り込んだ。

風の色が無色から様々な色に変わり七色に光り輝く。

「トウ・レスチエル・ハンジエクト！」

その瞬間、龍の体が魔牢ごと爆せて七色の灰を降らせる。

（あんな機能を持ち合わせた魔牢なんて今までに・・・）

【だって、私がつけたんだもの。】

頭に直接響く声にアシュリテイは顔を顰めた。

【ずっと、気になっているのでしょうか？】

「・・・っ」

事実をずばり言い当てられて、アシュリテイは言葉に詰まった。

【だから、さつきも避けられるはずの攻撃も当たってしまった】

「それが」

【そんな調子のままじゃ、迎えられる者も迎えられないもの。】  
・・・さく。



足音に振り向けば、プティ立っていた。・・目を空ろにして。

【本当はもつと遅くてもいいと思っていたけれど。貴方に消滅されたら本末転倒だもの】

『永久の契約に背き、彼の者の扉を開く』

「っお前」

プティが独りでに眩くと周りの景色がぐにやりと歪んだ。

【おいで。全て教えたげるよ】

歪み、収縮していく景色になす術がなままアシュリティは飲み込まれていった。

強い光に目覚めるとアシュリティはすぐさま体を起こした。

そこは世界を渡り歩いてきたアシュリティが場所を特定出来ずにいた。

何もかもを塗りつぶすような漆黒も闇の中。

『こうして顔をちゃんと合わせるのは初めてね。』

漆黒にも塗りつぶされぬ真紅の髪を柵引かせた少女が立っていた。

―闇夜の彼女・夢現への誘い?― (後書き)

あまりにも長すぎたので前後編にしました。

感想などくれると嬉しすぎて狂乱しますゝ(´・`)(´ノゝ)(´・`)(´

ノ

ここまで詠んでくださってありがとうございます！

―闇夜の彼女・夢現への誘い？―

漆黒の闇につぶされる事なく目の前に存在する真紅にアシュリティは不覚にも目を奪われた。

『初めまして。貴方と顔をちゃんと合わせるのは今回が初めてだけねど』

少女の顔は柵引く髪で隠され、その心情を窺い知る事は出来ない。

『でも、私は貴方をずっと見守っていた。この世界に生まれ堕ちた時から』

少女は胸の前で手を合わせ、何かを祈るようなポーズをした。

「私に何の用があつて、ここまで連れてきた」

『貴方にあなた自身の事を知ってもらおうと思つて。』

あんな場所じゃ碌な話も出来はしなかつたし、誰にも邪魔をされたくは無いから』

そう言うと、少女は何処からかガラス質の本を取り出した。その本はページが無く、表紙と裏表紙だけのシンプルな物だった。だが、アシュリティは警戒を更に強めた。

少女は、くすくす、と微笑む。

『そんなに警戒しなくても、ここには貴方を蝕む存在はいない。』

ここは。ここには貴方しかいないのだから』

「お前もいるだろう」

少女は少し驚いた顔をした。

『あら、私も一個の存在として見ているのならそれは間違い』

硝子の硬質な本がまるで紙のように。

僅かに風が吹く度にあるはずの無かつた本のページが現れていく。

『私は、私達という存在は仮初の物。』

少女の瞳に何の感情も無い事を感じたアシュリティはバク転で素早く距離をとる。二人の距離は約、十五メートルほど。

『捕まえた。』

「っ！」

着地点を分かっていたかのようにアシュリテイの足や手に細く白い線が幾重にも巻きつき、動きを封じられた。

『貴方は、世界の繭、を知っていますか？』

「世界の繭・・・？」

『ああ、知らないのね。世界の繭。それは、世界という巨大な存在を創るうえで必要不可欠な物』

少女が淡々と喋る間にも、アシュリテイに巻き付いていく線の数は増えていく。

『世界の繭には世界の理、核が入っているの。ただ、その核の本質はapathetic・・・無関心。だから、世界も時の流れのままに。当事者達の思惑通りに超流動な変革を起こしていく。その先は崩壊。』

「それが、何だ」

少女はアシュリテイに向かって手を伸ばす。まるで、誘うように。

『一応、念のために。・・・変革の先の崩壊の様子を見、感じてきなさい』

細い線は一齐にアシュリテイに次々に巻きつき、それは繭のように膨れ上がる。

『全てを見聞きした貴方の導く答えが、森羅万象に影響する。』  
誰も、繭以外何も無い漆黒の中、少女は一人呟く。

「全てを奏でる無色の詩を」

「キャンパー」

「アシュ！？」

リエシはいつの間にか消えていたアシュリテイを探していた。

「お兄さん」

「プティ！アシュを知らないか」

「あの人はいない。世界の何処にも。」

プティの無機質な声色、瞳にリエシは背筋が自然と伸びる。

「どういう、事、だ」

「あの人は、運命の流れとして。別世界にリンクされ、一時的に存在が記憶から消去された。貴方も記憶からも、もうじき消える。」

「・・・その別世界つっののは、どこからいける」

リエシの発言にプティは大声でリエシの腕を掴む。

「貴方、何を言っているか分かっているの！？あの人は世界の理を変える存在！たった一人の都合で、そんな・・・！」

リエシは近くの樹を力一杯に殴りつける。

「もう、俺は・・・」

プティは深く溜息をつく、先程の無表情から一変。優しげな微笑を浮かべた。

「貴方は・・・そうですね。なら、私は貴方を導こう。無色夢幻の詩に寄り添う旋律として。貴方を。」

プティは小さな薄青色の華を取り出したそれは淡い藍色の光を弱弱しく発している。

「これが、向こうの世界と繋がっている空間へ続く扉。どうするの」

「聞く必要があるか？」

「それもそうね。・・・それじゃ、行きましょう。」

プティの手のひらに乗った華の花弁が、はらり、と一枚一枚地面に落ち光を残して消えていく。

「彼の者、寄る辺無き翼を導く風となれ。」

―漆黒の空間―

プティとリエシが降り立ったそこには何も無い。生命の息吹も何も。ただ、繭のような白い球体が淡く光るだけ。

プティはそれに近づくとリエシを手招きして呼んだ。繭の中には、白髪の幼子が体を丸めて眠っていた。その顔はとても安らかな表情で。

「最後にもう一度。行けば、帰れる保証は何処にもない。」

「それでも、俺は行く。」

「そう。ならば、行きなさい。」

繭に触れたリエシの手に繭の糸が巻きつく。

消えていく意識の中、リエシはプティの優しい瞳と言葉を聴いた。

「……………」

「……………」

すう、とアシユリティが目を開けるとそこは宮殿のような場所で周りには大勢の人が頭を垂れていた。

「お目覚めですか」

レシエラ・カリエル様」



## ―過去の迷宮・進めぬ彼女―

「ああ、皇女様。どうか、どうか娘を助けてやって下さい！お金ならいくらでもお出ししますから！」

過去の世界とアシュリテイがリンクして、数週間が過ぎた。アシュリテイは天使だった頃の記憶がリンクの副作用によって封印されシエラ・カリエルとして生きている。

―レシエラ・カリエル―

古代時代から存在するイリエルカ皇国の王位継承者であり、癒しの力を有する事から臣下の人々から

慕われている。彼女自身、国民と自分との間に身分は無く平等だという考えを根強く持ち、時々、宮殿を抜け出しては城下町にやってきている。

「頭をあげてください。分かりました、娘さんの病を治しましょう。」

┌

「！ありがとうございます」

レシエラは微笑むと、男性の家へと向かった。男性の家では、十代半ばの少女がベットの上で眠っていた。

その寝顔からは少女が病を抱えている様子など分からない。

「今は薬で安定していますが、いつ症状が出てもおかしくないと・

・

「分かりました。少し、離れていただけますか？」

レシエラは少女に手を翳した。すると、レシエラの手から少女へと光を纏った風が弱く吹く。

やがて風が収まった事を確認したレシエラは男性に微笑んだ。

「もう大丈夫でしょう。後はこのまま無理をさせなければ、体調も回復していくでしょう」

「ありがとうございます！本当に何と言ったらよろしいのか・・・

┌



レシエラは首を振ると、男性の家を出た。後ろから聞こえる嬉しそうな声を聞きながら。

―ユエルカ宮殿―

日もそこそこに暮れた頃、レシエルは誰にもばれないように自分の部屋へと続く長い廊下を若干恨みながら忍び足で歩いていく。誰にもばれずに、部屋の前まで行くと素早く入り深く安心した息をつく。「はぁー、今日もセーフ」

「今日も、アウトです。レシエラ様」

ぎちぎちと音が鳴りそうな首の回り方をすれば、窓辺に寄りかかる一人の深緑のローブを着た少年。

つい最近、宮殿で働き始めた者だが宮殿に同年代がいなかったレシエラにとって気兼ねなく話せる唯一の人でもある。

「もうすぐ戴名式なのですよ。御身に何かあつたら」

―戴名式―

イリエルカ皇国の王位継承者はある程度の年齢になると皇王から神の名、神名を授かる。臣下の国民にとっては喜ばしい事だが、神名を授かる王位継承者にとっては苦痛の儀式でしかない。

「はいはい。それよりも」

レシエラは少年の横の大きな窓を開けるとそこから入る夜風に当たる。

「今日はどんな物語を聞かせてくれるの？」

少年が旅人として流離っていた過去を知ったレシエルが夜にその時の話をしてもらうようにしたのだ。特命という形で。

「では今日は、ある砂漠で起こった奇跡のお話を」

少年はぼつり、ぼつりと話始めた。レシエラは頷くでもなく、ただ窓辺にもたれかかり聞いている。

「・・・そして、何も咲くはずのない砂漠に咲くはずのない一輪の花が咲いた。その花の名は、フウリンソウ。」

「どうして、咲くはずのない花が咲いたの？」

「その花は砂漠を愛した彼女がせめてものお礼にと、咲かせた奇跡

の花。フウリンソウ、花言葉は『感謝』。砂漠を愛した彼女らしい花。

そして、彼女らしい花。」

レシエラが少年の手を見ると、そこには一輪の小さな花。レシエラはそれを見て僅かに優しく微笑むと夜風に髪を靡かせ。

l s m l l m i r c l d r y h r t d r i p y d r i  
l t s k s n g g l m l d y 《小さな奇跡は乾いた心に  
落ち、少しずつ染みこむ、寄り添う旋律》――

レシエラの声は透き通ったような、優しく、冷たく、愛おしい声で詩を奏でていく。その詩は、物語の詩。砂漠を愛した女性に捧げるように夜の闇に手を伸ばし。

l s n g g l m l d y n c r s f t m g b l v d  
l r g - w n g d t k f f 《寄り添う旋律はやがて大き  
く愛しい翼を広げて飛び立つ》――

唐突に伸ばした手が、びく、と震えてレシエラは詩をやめて夜の闇に目を光らせる。目の動きが何かを探すように素早くあちこちに動く。

「レシエラ様」

「蒼い、空。わ、私。」

「レシエラ様」

少年の呼び声にも反応せず、レシエラはうわ言のようにつぶやいていく。

「わ、私の、神め、い。」

「レシエラ様」

「私、は

ディ……………」

やがて、意識を手放したレシエラを少年が抱きかかえる。レシエラの顔はとても安らかだった。

「レシエラ。眠った？」

僅かに開いた扉から聞こえた幼子の声。

「ああ。さっきのうわ言が嘘のようだ、今はゆっくりと眠っているよ」

扉が開いた先には真紅の髪の子供。

「今度は、どんな言葉を予知したの？」

「詳しくは聞き取れなかった。でも、いつもとは違っていた。相変わらず、世界真言の詩の意味は分からないけれど」

「世界真言《忘却と慈愛の詩》」

神になれる素質を持つ天子、神に匹敵するほどの力を有している人間が神の長から生まれたと同時に授けられる言葉。その言葉で綴られた詩はほんの少し口ずさむだけで世界の理を変え、世界を創造しうる力を秘めているため、常の生活では詩の言葉のみならず詩の旋律、詩の存在すら記憶の奥底に封ざれている。だが、詩を有するその身に何かしらの危機が起こった場合、記憶の封が解かれ、詩は主を守るように周りにあらゆる奇跡を引き起こす。

現在、この真言を有し、何時いかなる時も口ずさめる存在は天界・魔界・人間界においてただ一人。

それが、イリエルカ皇国の王位継承者レシエラ・カリエル。

「世界真言という物を知っているだけでいいわ。そんな人も今は滅多にいないから」

「神名……。また、戴名式で何か起こるのか？フェリル」

フェリル―真紅の髪の少女―は安らかに眠るレシエラの頬を撫で、険しい顔で頷いた。

「今の言葉から予測するに、戴名式のラスト・・・神名授与。その時に何かしらのアクションが起こるはず。」

「いつも後追いで、いつも後一步が届かない。今度こそ」

「・・・そろそろ向こうもじれったくなっているはず。明日、一気

に詰める」

フェリルはレシエラを天蓋のベッドに寝かすと少年に退出を促した。

「さて、と。貴方も早く眠りなさい。ーリエク」

「ああ。それじゃ」

少年が部屋を出て、数分。フェリルは優しく、冷淡な声で一人、呟く。

「神名。貴方はどんな名を授かるのかしら？」

さらりと白髪を撫でる

「rī《支配》かwng《翼》か。」

闇夜に残る残月を眺めてレシエラを起こさないようにゆっくりと踵を返して部屋を出た。

ー翌日・レシエラー

苦痛の日。望まない祝福を受ける日。

いつものように朝は来る。

「レシエラ様。今日のご予定ですが・・・」

メイドが予定を言っていく。その後で用意されていたドレスに着替える。

今日をもって、イリエルカ皇国王位継承者レシエラ・カリエルという存在は世界の何処にもいなくなる。

レシエラ・カリエルという存在は《人》ではなくなる。

ー同日・フェリルー

いつもより早く目覚めたフェリルは動きやすいドレスに着替える。

そして微かに感じた同じ存在の波動に窓を見ると

ーこんにちはー

「っー」

思ったよりも近く、自分よりも濃い真紅の髪を風になびかせた口――  
ブの少女が窓の外の縁に腰掛けていた。

「あら。驚かせてごめんなさい――」

「どうして、ここに？」

「ここは私が創り上げた世界。創造者たる私が来れないとでも？――  
「貴方と同じ存在だけれど・・・貴方の目的が分からない。」

「私は、理想の世界を創りたい。そのためにあの人が必要なの――」

「理想の世界？」

「そのためにあの人をこの檻に閉じ込めた。完全なる繭になるには  
あの子の意識をも支配下に置かなくてはいけない――」

「こんな脆い檻、すぐに壊れてしまう。貴方の思うとおりにあの子  
は動かない――」

「あの子は貴方が思うよりも、脆く、弱い――」

少女は嘲笑すると窓の縁からひらりと落ちた。

――宮殿前広場――

広場には国中の人々が集まり、儀式が始まるのを今か今かと待ちわ  
びていた。

そこに清楚な白いドレスを着たレシエラがゆっくりと階段を降りて  
いく。レシエラの胸元には碧色のブローチが日に当たりきらきらと  
輝いている。

「御手を。レシエラ様。」

いつもとは違って何処か他人行儀なりエクに心の内で不貞腐れなが  
ら伸ばされた手を取り、最後の一段を降りた。

広場に集まってきた人々はレシエラの姿に歓喜し、泣き出す者がレ  
シエラの視界の端に見える。

レシエラはドレスの裾を引っ張らないようにゆっくりと歩を進めて、  
広場に設置された壇上で待つ皇王の前まで行くとその前でひざまつ  
いた。

そして  
始まる。儀式が。

―漆黒の空間・世界の繭―

繭に包まれたレシエラを少女はただ眺めていた。

繭は心臓の鼓動のように脈打っている。

―宮殿前広場―

儀式は、最後であり儀式最大の見せ場である戴名式まで滞りなく進んだ。

皇王が金の杖でレシエラの両肩を軽く当てていく。

「汝の御霊が永久に輝き、世界を照らさん事を」

「我の名を世に返還し、新たな神名を授かる事をここに。」

「汝、その身に秘めし神名を宣言する事を我、イリエルカ皇国が願  
い奉る。」

「我の身に秘めしー」

その時だった。

レシエラの耳に何か別の鼓動が聞こえる。その鼓動は自分の身のうち  
ちに聞こえる心臓の音ではない何か別の鼓動。

その鼓動は次第にレシエラの鼓動を飲み込むまでに響き渡り、鼓動  
と共に、一つの旋律が響き渡る。

l h r c l s t h w n g c m g r t w r l d c m  
g r t c c n 《さあ、翼を閉じて還りなさい。大いなる世界  
に。還りなさい。大いなる繭へ。》―

いつの間にかレシエラはその旋律に静かに耳を傾けていた。周りの

人々がざわめくがそのざわめきはレシエラの耳には届かない。  
届くのはあの旋律。

l h r s p n t r n t y h d 《さあ、紡ぎなさい。永遠の  
真名を。》ー

「フェリル！」  
リエクは可能な限り、大声で叫び、遠くに、群衆の中にいるフェリルを呼ぶ。

「何かが、レシエラにリンクしている！」  
フェリルは群衆から飛び出し、リエクと合流した。壇上を見ても何ら変化は無い。・・・ただ、見る分には。  
だが、よく見ればレシエラの瞳は焦点が定まらず地面をさまよう。

l h r p c f m n d c h n b d y l v . . . 《さあ、  
安らぎの鎖に身を委ねて・・・》

長い静寂を打ち破ったレシエラの一言。

「我の身に秘めし、真の名は」

『w r l d p c f m n d c h n 《世界に安らぐ鎖》』

その瞬間、レシエラの背から眩い無色の翼が現れ、全ての時間が動く事をやめた。

翼は光の反射でガラスのようにきらきらと輝く。周りに散る羽も同じく輝く。

ただ、止まった時間の中でも動く事の出来たリエク、フェリルの二人は今日の前で起こっているレシエラの異常に対処すべく全速力でレシエラの元へと向かった。

『どうして、邪魔をするの』

「「・・・え!?!」」

『私はただ、幸せになりたいだけなのに。そう望んでるだけなのに。まだ私は望む事を許されない人形なの?』

翼が顕現したと同時に意識を失ったレシエラの口から雫が零れるようにぽつりぽつりと発せられる言葉。

言葉を発する声はいつものレシエラの声と、僅かに低いレシエラの声。

『ごめんなさい。ごめんなさい。私、ちゃんと歌うから・・・私から私から詩を奪わないで・・・!』

意識の無い人が頭で考えた事を、自らの意思で口にする事は不可能だとしたら。

「これは、レシエラの・・・。レシエラの本当の、心の言葉?」  
リエク、フェリルのどちらが発した言葉かは分からないがどちらかが呟いた。

『詩・・・を。詩をもつと歌わせて。私は』

【世界に絡まる永遠の鎖。安らぎに身を委ね、詩を紡ぎ続ける者】

低い声だけが発した言葉にその場が凍りつく。

ゆっくりと顔をあげたレシエラ表情はレシエラでは無かった。

【この子は私。この子は私の。】



声と共にゆっくりと翼がレシエラを包み込んでいく。

「リエク！」

リエクはフェリルから小さな懐中時計を受け取った。

「ああなつてしまった以上、もう止められない！……リエク、分かっているでしょう？」

「……時間を巻き戻す」

それはこの未来を変えるために二人が毎回行ってきた事。

リエクは翼に包まれていくレシエラを見、悔しそうに呟いた。

「……ごめんっ。また、守れなくて……っ」

そして、震える手で、時計の針を逆に回した。

周りが歪み、巻き戻されていく。

時間を巻き戻る存在にレシエラは、アシュリティはいない。

これは、二人だけの戦い、だから。

―過去の迷宮・進めぬ彼女―（後書き）

やっと更新できました。

ぐだぐだが全く解消されていませんが・・・orz  
読んでいただきありがとうございます！  
ここから新しい章へ突入です。

## ―過去の迷宮・偽りの彼女?―

―イリエルカ皇国・ユエルカ宮殿―

戴名式が明日に迫った宮殿内では給仕達が騒がしく走り回っていた。

「レシエラ様!レシエラ様、どちらにいらっしやるのですか!?」

その当の本人、イリエルカ皇国・王位継承者レシエラ・カリエルと  
いうと……

「はぁ……」

中庭で寝転ぶ少女は大きく溜息をついた。

少女の名はレシエラ・カリエル。

「戴名式なんて、私はやりたくないのに……」

戴名式。それは、王位継承者が神の名を授かり人の身分を捨てて神  
の存在となる一つのけじめの儀式。

即ち、皇王の家族ではなくなるという事。

即ち、臣下の民と対等ではなくなってしまうと言う事。

「逃げちゃおうかな……」

レシエラは勢いよく飛び起きると、閃いたように人差し指を天へと  
真っ直ぐに伸びた。

「うん。そうしよう!決定!」

「決定ではありません。」

「……あ、リエク」

リエクがレシエラのすぐ後ろでにこにこ満面の笑顔で(激怒して  
いるが)レシエラのドレスのパウスリーブをしっかりと握っていた。

「リエク。見逃してくれるでしょう?」

「駄目です。ただでさえ大切な御身。戴名式までに何かあれば……

」  
「別に私が出席するのなんて最後の神名授与の時だけなのにさ……

」

レシエラがぼつりと呟くとリエクが怪訝な顔で言葉を反芻した。

「神名、授与」

「どうした？リエク」

リエクは軽く首を振ると、レシエラの首元へ手刀を打ち込んだ。レシエラの体がぐったりとする。

「神名授与、か」

空を仰ぎ見ると、空は眩しいほどの青色だった。

― 宮殿内・地下の神殿 ―

手に持ったランタン以外に地下の神殿に明かりはない。

そこに現れたリエクは先に来ていた訪問者に僅かな微笑みをを浮かべた。

「早いな。フェリル。」

「ええ。それでどうしたの？上では話せない事なの・・・」

リエクはゆつくりと頷いた。

「もしかしたら、今まで思っていた真実が根底から覆るかもしれない」

「・・・詳しく、いいかしら？」

― 宮殿内・レシエラの自室 ―

ゆつくりと目を開けたレシエラが自室にいると把握するのに、その時間は掛からなかった。

「・・・リエクの馬鹿」

そこにいない、自室へと強制連行してきたリエクを恨みつつ、レシエラは大窓から入る風に髪を舞わせた。

大窓から入る風は季節に關係なく、心地よい風が吹く。

季節、時間。何も差し込む風に干渉する事は出来ない。ずっと変わらない風が吹く。

「さて、と」

レシエラは吐息を零すように、小さく本当に小さく詩を紡いだ。

l e d l l b r k 《終わりの鐘を壊しましょう》

詩に呼ばれたように、レシエラの背から透き通る翼が羽を広げた。両手には淡い光の粒がちらちらと零れ、零れた光は落ちることなく、蛍の光のように宙を彷徨う。

「私は壊す。私に終焉をもたらす終わりの鐘を。」

レシエラの思いに呼応するように光は強く発光した。

そしてレシエラは窓の縁に立ち、ゆつくりと宙に身を投げた。だがその体は重力に逆らい、ふわりと羽ばたいた翼に支えられ宙に留まった。

翼を羽ばたかせ、国中が見渡せる高度まで飛ぶと両手を広げ。

「皆、聞いて。私の願いを」

翼がより強く羽ばたき、羽が散っていく。

↓

↓

レシエラの詩は超音波のように高く、綺麗に国中に響く。そして、放たれた詩は国の時を止めた。

草木の生長も動物も、イリエルカ皇国という国は時間の領域から外れた。翼をたたみ、降り立った場所はあの広場。戴名式を行う広場。

明日に迫った戴名式に必要な階段に囲まれた壇上を何も履いていない足で上がっていく。あらかじめ敷かれていた絨毯のおかげで裸足の足でも階段の冷たさは感じない。

壇上の上には拳サイズの瑠璃色の宝玉。それは光に当たっても光らず少しづつ濁りが混ざっていく。

レシエラは宝玉を手にとると、強く握る。宝玉はその見かけとは裏腹に脆く、びしびし、と音をたてひびが入り始めた。

もう少して粉々に砕けそうになった時。

「レシエラ！」

「・・・リエク」

息を切らしたリエクが宝玉を持つレシエラの手を握っていた。

「・・・何を、するの。離して」

「レシエラ！貴方、何を」

続けてやってきたフェリルに僅かに目配せしつつも、宝玉に力を込め続ける。また、ひびが入る。

「何してるの？レシエラ。」

「見て分らない？」

レシエラの声は冷たく、今まで聞いた事無い声色だった。

「離して。レシエラ」

「嫌。」

l e d l l b r k 《終わりの鐘を壊しましょう》――

「っ痛！」

何かに弾かれたように、リエクの手がレシエラの手を離す。

「フェリル。貴方なら、分かるはず。この力が何か」

さあ、っとフェリルの顔から血の気が引いていく。

「もう、遅いけれど。」

レシエラの瞳が二人を捕らえる。

「邪魔、しないで」

レシエラの背にたたまれていた翼が大きく羽ばたき、周りに風を起こす。その風は二人の視界を潰すように煙のように白くなった。

レシエラの翼は大きさを増し、羽が一斉に散った。

l e d l l b r k 《終わりの鐘を壊しましょう》――

羽は分裂して、強く発光した。その強い光に二人は思わず目を閉じ、その中でレシエラの詩を聞いた。

l p l s n l y n w h s r l z 《どうか、一つの願いを  
現させて》  
ー

その声はさっきのとは違い、震えて、涙を堪える声。

「レシエ……」

リエクは名を呼ぼうとして、途中で止めた。そして

「……アシュリテイ！」

呼んだ。彼女の本当の名を。

顔を歪め、涙を堪えるレシエラを感じ、意識は静かに落ちていった。

―過去の迷宮・偽りの彼女?―（後書き）

今回も前編、後編とします・・・。何か少しずつすごい事になっていきますがお付き合いいただければ幸いです。  
ここまで読んで頂きありがとうございました！  
また、後編でお会いできれば・・・。



―過去の迷宮・偽りの彼女?―

暗闇の中、リエクは身を委ねていた。少しずつ訪れる睡魔を受け入れながら、何故こうなっているのかを軽く思考を流しながら考えた。大体の事は覚えている。過去の世界に飛んできた理由も。

でも、誰のためだったのか。そこだけがぼっかりと穴のように抜け落ちていた。

そんな事を考えていると、何処からか、少女の詩が聞こえた。その詩は乾いた地に落ちた雫のように心に染み渡っていく。

I p l s n l y n w h s r l z 《どうか、一つの願いを  
現させて》―

その詩が流れるたびに、記憶がおぼろげに浮かんでくる。無口で、感情を顔に表しにくい少女。でも、誰よりも不安を抱えている少女。

その、少女の名は

「う……」

頭に響く痛みを堪え、目を開けるとそこには強い光を放つ翼は無くなっていった。そして、レシエラが仁王立ちでリエクの前にいた。

泣きそうな顔で、苦しそうな顔で、不安そうな顔で。

ただ、その手が握る宝珠にはかなりの数のひびが入っている。あとほんの少し力を入れれば完全に割れてしまいそうなほどに。

「……あ。起きちゃったんだ。」

悲しむようにリエクと宝玉を交互に見つめるレシエラはやがて、小さくため息をつくときわ笑い笑った。

「あと少して全部割れそうだったのに」

「どうして、割ろうとするんだ」

「これはね、戴名式に必要な不可欠な物。これを割ってしまえば、私は神の末席を与えられる事もない。」

ぎしり、と宝玉に力が入り、ひびが広がる。その様子にレシエラは優しく、悲しく微笑んだ。

「私は、人のままでいられる。．．一人にならなくても済む。」

「神の末席？レシエラ、君は一体何を？」

「何も知らないのね。あの子からも聞いてないの？．．．そこに眠るその子から」

レシエラがすつと指さした先には、あの強い光を受けて以降気を失ったままのフェリル。

「いいよ。話してあげる。戴名式の本当の意味を。戴名される王位継承者の苦悩を」

「代々イリエル力皇国は繁栄を保ち続けるために王位継承者に生まれた女はある程度の教育を受け、個々の固有能力を覚醒させると戴名式を執り行う。」

どうしてだと、思う？．．．固有の能力を持つ者は神の末席を与えられる。代々この国は皇女を神という鎖に縛り、何をするとと思う？レシエラは誰もいない舞台で演じるかのように、両手を広げ、リエクに問うた。もちろん、リエクがその答えを知りたいはずはないのだが。

「．．．．．答えは簡単だった。歌わせるの。詩を。この数多の命を創り出した創造主が己の夢を語った最初で最後の詩

「世界真言 偽りの泡沫の宴」を。」

「世界真言にも、それぞれ種類があるのか？」

「種類、というよりも元の詩から派生したものだ。でも、歌った者によって詩が世界に与える影響は変わる」

レシエラは顔を上げて、広がる蒼色を見ながら詩を紡ぐ。

「……！」

レシエラの手のひらに空と同じ蒼色の雫が現れ、それは石の投げられた水面のようにゆらゆらと揺らめいている。

「この世界の全ては詩によって紡がれた。」

ぎゅ、っと手を握り蒼の雫を握り潰した。ぱちん、と音をたててレシエラの握られた手から蒼い液体が零れ宙で消えていく。

「話を戻すね。……世界真言 偽りの泡沫の宴 の効果は思い描いた妄想を詩を仲介して現実に顕現させる。」

「つまり？」

「……例えば、詩を紡ぐ中で自分が神になりたいと願えば願った者は神・正確には神と同等の力を得られる。」

レシエラは薄く笑うと手のひらにまだ残る蒼い液体をリエクに見せた

「普通の詩なら詩で生まれたものはずっと残る。でも、世界真言

偽りの泡沫の宴 は違う。その詩は歌い続けなければ、幻想として消えてしまう」

「なのはどうして、その詩を求めるんだ」

「ずっと歌い続ければ妄想は顕現し続ける。その効果は古代の王達には酷く魅力的だったのでしょう。」

そして、もう一つ。その詩は末席であろうと神の資格を持つ者は歌う事が出来る。王達は皇女達を神の末席に座らせ、詩を歌わせ続けた。神としての命尽きるその時まで」

「……戴名式は、皇女を神に仕立て上げて詩を歌わせるためのぎ式？」

「……もう、いい？」

レシエラは今まで手加減していたかのように手に込める力を一気に強くした。リエクは冷静―心中では焦りながら―にレシエラを止めた。

「どうして、そんな事を俺に？」

「別に。ただ、」

「ただ？」

「気まぐれ。」

「バキヤッー」

宝玉が割れた。その瞬間、レシエラの体が薄く淡い光を散らしながらほどけていく。

「ああ。やっと私は怯えなくていい。」

「っーレシエラ！」

レシエラは何も答えない。まるで、その名を呼ばれるのを嫌うように。

「アシュ・・・ッ！」

本当の名を呼ぶさなか、リエクは見た。優しげに微笑む姿を。

その微笑みと、伝う涙を。ゆっくりと口を動かし、何かを伝えようとする姿を。その言葉も。全てがほどけ、消えていく。

↓

↓

何もかもが白く消える。記憶も。感情も。過去の繋がりも。何もかも視界が白く塗りつぶされる。その刹那、見えたのは大粒の涙を零す、白髪の少女だった。

そっと目を開けばそこに広がるのは青々とした若葉の茂る樹の下。ふ、と顔を上げれば

『はいっ』

誰かが、自分へと一輪の花を差し出していた。

『あげる、これ私の大好きな花なの。』

自分はその花を受け取った。

ただ、それだけだったのに、涙が溢れ出る。止まらなくて。

顔を見ることは出来ないけれど、きつと少女は困惑しているだろう  
でも、少女は

『辛かった、んだよね』

その少女は共に涙を零してくれた。そして、涙を拭う事なくそつと  
手を取り。

『ねえ、貴方の名前は』

「あ、俺は・・・っ」

『私は』

視界にノイズが走る。声が遠ざかる。意識が消えていく。

微笑むその顔に、何処か遠くに置いてきた記憶が一瞬だけ蘇る。

白い髪。ああ、貴方の名は

なんですか？

―過去の迷宮・偽りの彼女?― (後書き)

今回も短くなってしまいました(´・`・´)

この後の新章(早いですがね)からアシュリティの出番がめっきり減ります。

次からはまた現代に戻って、世界を駆け巡る予定ですww  
ここまで読んでいただき、本当にありがとうございました。

## 「現の道標・欠落の彼女“序章”」

『ぐるうあああ』

牙を向け、襲いかかってくる魔牢をリエシアルは軽くあしらい一箇所に集め、そして。

「さようなら。来世で良い生を。イセリアル・パレード」

透き通る炎で一気に燃やし尽くす。燃えた魔牢達は光の粒となって空に吸い込まれていく。まるで、鳥の羽のように、軽く、優しく。

リエシアルが過去の世界―正確には、あの彼女の望みを具現化した世界―から現代へ戻ってくると、世界の、もっと細かく言うのなら魔牢と天界の仕組みが変化していた。

怨念が形を成した者。魔牢は改変された世界では、<欠落し、彷徨う者>とされ。

天界はその事に対して、次のような見解を発表した。

「魔牢の対処に関して、天界に送還するよう。なお、魔牢を消滅させる事を禁じ、しかし

限りなく浄化させ、転生可能な状態で送還すること。」

この見解に悪魔天使問わず、大騒ぎとなり、浄化可能な武器を生成し直すために魔牢討伐任務にあたっていた天使、悪魔共に僅かな人数を残して地上から姿を消した。

そのためか、地上に残った者たちには前よりも多くの討伐任務があった。

リエシアルもその一人のだが、どの者よりも少しだけ違っていた。

『ぐるうううう・・・』

「っふ」

『ぎゃううう！』

ただ、何も思わず一心不乱に魔牢を浄化、送還していく。まるで何かを忘れようと必死に。

ただ、機械のように次々に襲いかかってくる魔牢を相手していく。

彼の指に触れられた魔牢はあらぬ方向へと瞬時に飛ばされ、空間に固定される。

そうして、溜まっていった魔牢達を一気に浄化する。

「いつか、始まりを。インセトリアル・コロセスト」

一瞬、強いひかりが辺りを塗りつぶし。そして。

「……ふわ、り……」

辺りを白い炎の羽が覆い尽くす。それはあまりにも幻想的で儂く、そして、どこか悲しい。

まるで、誰かへの餞のように。

“どうしたの”

風に運ばれたかのような微かに聞こえる笑いを含んだ声。

“さくさくと倒していくなんて、いつもの事だけねど。”

「それが？」

声は、あまりにもあっさりとりエシアルの心に引っかかるものを言い当てる。

“夢の事？それを気にしているのよね。貴方は”

夢。それはいつもリエシアルが昼夜関係なく唐突に訪れる一瞬の夢。

「気にしていても解決はしないし……」

“その夢。気になるのなら、少し旅というものをしてみないかしら。”

「旅？何処へ。何をしに」

“遠い昔へ……。あの頃の忘れ物を取りに、かしら？場所は行けば分かるから。”

声に僅かな、聞き逃してしまいそうなほどの哀愁が混ざる。

「……それもいい、かもな」

声に後押しされたかのようにリエシアルは了承した。

「いつもの夢。」

夢と呼んでもいいのかというくらい短い、瞬きの、刹那の夢。忘れてしまってもいいのに。気にするほどの事でもないのに。



どうしても。忘れられない

“気まぐれ”

の言葉と共に見せられた優しい、哀しい、微笑みを―

― 現の道標・欠落の彼女 “序章” ― (後書き)

今回はこのぐらいで許してくださいorz

今度は頑張ります(時間も多めに取れそうなので…)

最終的には過去と繋がるような感じにしていきたいです。まだまだですが( ; ^ ^ )

では、ここまで読んでいただきありがとうございます！

「現の道標・欠落の彼女“いつかのほじまり”」

“さて、と。それじゃあ、行きましようか”

声は僅かな期待を込め、急かすように。リエシアルは肝心な事を声に尋ねた。

「行くつて言つても、何処に。」

“まず、は……記憶を覗く。彼女がこの星に残した記憶の断片を。”

その声を最後に、辺りの景色が一変した。

何処を見ても闇が覆い尽くす。一寸先も見えない、自分の足元が見えれば良い方だ。

「ここ、は…?」

“ようこそ。世界の中心、繭の眠りしここへ。”

声はいつも聞いている時よりも、はつきりと、鮮やかに。

声のする方へ歩いていくと、小さな「見た目11、12歳の少女が容姿に似合わない微笑みで立っていた。

“ふふっ。この姿で会うのは初めてかしら。私は、プティ。空っぽのプティ”

プティ、と名乗る少女はリエシアルの手を取ると直ぐ様走り出した。暗い闇の中を、明かり一つも灯さずに。

“ここには、ね。本来なら、繭に眠る神の記憶が映し出される場所でも、今、何にも見えないでしょ?”

プティは、ある程度進むと歩みを止めた。プティの視線の先には、一つの繭。人間大ほどの大きさのそれは僅かに鼓動している。しかも、ほんのりと温かい。

“今はね、この子。眠っているの。記憶が完全に揃っていないければ、繭として、生きていく事は出来ない。”

リエシアルは恐る恐る繭に触れた。すると、自分の頭に直接声のよ  
うなものが混じったノイズが響く。

「……………か、……………い……………」

その声は、安らいでいて、寂しげで。幼くて、大人びて。

「それで、俺に何をさせたい？」

“この子のカケラを、世界中に散らばっている記憶の断片を集めて欲しいの。”

プティは泣きそうなのを堪えた顔で微笑む。

“大体、カケラの数はずつほど。それが何処にあるのかは私がナビゲーションするわ。”

リエシアルはプティの願いを。

「……………俺に何の得がある。」

“貴方も、記憶が無い部分があるのでしょうか？それはね、貴方の記憶もカケラとしてこの子と同じ所に散らばっているわ。……………どう？貴方の記憶も取り返せるわ。貴方にも得がある。”

「……本当、なんだな」  
リエシアルは無意識にプティの目をしっかりと見つめていた。プティもそれを逸らす事なく受け止める。

“私の願いを叶えてくれるなら、私は全力で応えるわ。それは、約束する。”

プティは更に優しく微笑むとリエシアルの手の平にガラス細工の小さな花弁を落とす。それは、手の平に落下する事なく手の上で僅かな光を煌々とさせている。

「これは……。」

“それは、この子のカケラを探す上で必要不可欠なもの。この子のカケラを見つけてくれる探査機のような物だと思ってくれても差し支えないわ。”

「……分かった。それで、最初の目的地は」

“そこへは、私の力で送ってあげる。……さあ、行きましょう”

その声と共に暗闇の空間は閉じた。

眩しい光に目を覚せばそこは、旧新宿区。

ー現の道標・欠落の彼女“いつかはじまり”ー（後書き）

大変遅すぎました…（、；、；、；）

また、後からもう一回行った所を巡る旅になりますので当分アシユは出てきません。

名前すらも出ないと思います（、；、；、；）ただ、あの子、という名がこれ以降出てきたらアシユだと思ってください（、；、；、；）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2267v/>

---

Ash,poetry with

2011年10月29日02時16分発行